

# ダンテ神曲解説序説

石倉小三郎

## 第2章 世界的古典としての神曲

哲学者シュリングはゲーテのファストを以て『独逸人の最も本義的なる詩』であるとして、この短い言葉を以てこの大作を極めて適切に表現し、独逸人に向ってその意義を闡明したのであった。しかしダンテ神曲の意義を始めて独逸人に紹介したのもこのシュリングであった。彼はその時『宗教と詩が結びつく最も神聖なる領域の中にダンテは祭司長として立ち、そして現代の芸術に向って彼の任務を闡明したのである』と云っている。これはまた意味深い極めて含蓄ある言葉であるが誰しも一応全面的に理解し首肯し得る語句であると思う。

一つの民族が、その心的体験に就て云はんと欲する凡てのものが、特定の作家のある作品の中に圧縮されて存在することは真に著しい事実であるが、われ等はこれをホメールの『イーリアス』『オデュッセウス』に見『聖書』に見、ダンテの『神曲』に見、沙翁の『ハムレット』に見、ゲーテの『ファウスト』に見る。この5は世界文学の最も秀抜なるものにして、苟くも人生の帰趨に信仰ある者が世を終るまで師友とすべきものである事は、先づ動かすべからざる通説であると云ってよいと思う。そして数世紀に亘ってその価値を失はず、ある文化国民の胸の中から出て文化世界の文化財となった偉大なる幾多の作品は一天才のみの特別の所有物ではなく、1人の創造的な個人だけの力によって作られたものでもない。それは自然界の生産物の如く、静かに生長しその成熟を待っている。そして時来れば始めて完全に成熟せる美果としてこの世に現はれるのである。その国民全体はその発生に関与しているのである。数代を通ずる永い期間が、歴史の流の中に詩の材料を集約せしめ、そしてある選ばれたる天才がそれを促へ、それに唯一の必然的にして永遠なる形式を与えるのである。彼等がその民族から祖先から受けたものを、彼等は深い内的体験として感じ、それを特別な型に鑄造し、自己の世紀の高さにまで高め、そしてそれを最高の文化財として、全人類の所有物として、自国民に返し与えるのである。かくてその作品は民族の守護神とも云はるべきこれ等天才と結びつき、その結合に於て、その民族の最も貴い伝統のこの土台の上に、それ等民族の詩は生れ出で成長した。かくして、彼の時代の精神と親しい結び附に於て、ダンテは彼の国民の深き思想と感情とその宗教的政治的熱望とをばその「神曲」に於て形づくり、沙翁はブリテン民族の理想を彼の国王劇人間劇に於て作り整えたのである。

神曲と、沙翁劇中最も深刻にして内面的な悲劇ハムレットと、ゲーテのファウストとは屢々一緒に比較される。これ等は何れも最大最後の事物、人間の最重要なる問題、即ち理想と生活、思想と存在との間の矛盾及び調和を取扱っている。一人のよい人間をば暗い衝動の中を、述いの暗い森を通して、そして人類の凡ての悩みを通して、またこの世の荒れた園を通して、最後の解放にまで達せしめることが、これ等の偉大なる芸術家及びその世界的詩作品の任務であり、彼等はそれを、それぞれの素質と材料と目的の差異に応じて、それぞれちがった方法でそれを全うしたのであった。彼等は何れも超感覚的なものにつながって居る。高い魂のみがその情想の力を以て予感し得るところの霊の世界から大なる使命が彼等に向って下り来る。ダンテに於ては凡てが幻想的である。現実は今全くあの世の内的観察の中に消える。そしてその国から罪山を経て天国へと導き高められる。シェークスピアに於ては、凡ての事が現世に於て演ぜられる。そしてあの世から来てハムレットの良心をゆり動かすところの霊は、彼を正にこの世の戦と混乱の中に遂い込むものである。伊太利の詩人はその敬虔さによって最高の観照に導かれたのであったが、英吉利の詩人にとっては人生の内容と目的は行動である。ゲーテの詩はこの2つのもの中間に立つ。その本筋は今全くあの世に結びつけられている。超人と悪魔との間の戦は超官能的な諸条件にのみ結びつけられている。しかしこの戦は地上で行はれ、地上で終る。

ゲーテのファウストは外界の諸々の条件の下に行はれる人間劇である。この点に於て中世の神秘劇に近いものであるが、その任務の解決の道に於てはゲーテも沙翁も共通したものを持っている。敬虔なる瞑想に於てファウストは彼の現世の行動を終えてはいない。活動的行為に於て、不断の努力に於てそれを完結する。それはまたハムレットの義務でもあったであろう。ファウストの努力的意志は、彼の為に天国を開いたのであった。沙翁はハムレットから魔力的なものを付けたとハムレットはデーモンの世界に対しては何等の威力は持っていない。霊は彼から願はれたのではなく、永久の火炎の中から下りて来る。そしてハムレットにとって地獄が開かれたとするならば、それはこの沈思の憂愁者が自ら陥った彼の考えと良心の内部の地獄である。彼はヴァイテンベルクに学んだ。しかし彼があゝの世の信仰に就てルッテルと思想を同じうするとしても、彼は彼自身として独自の立場に立ち、彼の運命は彼のために独りで開けて行く。彼の認識欲が生み出したところの懷疑が彼の不幸な宿命を齎らす。ファウストと同じく、ハムレットもまた背叛者である。彼は父の霊をば悪魔であり、彼を滅ぼすものであると思ってその命令に対する義務を怠る。血と愛と復讐の、それは彼にとって道徳的必然を意味するところのそれ等の自然な要求及び動機に対して、彼はこれを無視する。そして自分の判断に従って確実と思えるところの土台を求める。過去の時代の英雄を作りあげるところの素朴な信仰の念は彼に於ては失はれている。新しい本質、思考の人が彼に於て目覚めている。それは直接的健全な行動を忘れた人である。自分自身との戦に於て、彼の良心の苦しみ、悔恨、憂鬱との戦に於て—それは大に深められ、精神化され、洗練され、人間化され、従ってまた非常に悲劇的に高め

### ダンテ神曲解説序説

られているが一彼は独逸民衆本の反ルッテル的魔術師を思い起さしめる。この2つのタイプの間には大なる似通いがある。ファウストもまたヴィテンベルク出身であるが、偉人ルッテルの敬虔な固い素朴な信仰に対して、自分の大得意な大胆な理性を対立させる大胆なしたたか者である。沙翁もずっと後期の作に於てこの様な超人を、魔術家プロスペロの中に作っている、そして彼に善悪を超越する凡ての力を彼に与えたものそれは彼の想像の魔力であって、それがアーリエルに於て具体化されているのである。これがゲーテのファウストと沙翁の超官能的世界とを結ぶ唯一の機縁である。それは恰もゲーテのファウストの世界の中にダンテの思想が唯一度だけ光を投げ込んだのと同じである。即ちファウスト劇の終りで、聖化されたるグレーチヘンが、ここで彼女がベアトリーチェと同じ性質の聖女となって、神秘合唱が「永遠の女性われ等を引き行く」という教えを告げるところがつまりそれである。

ダンテはカトリック世界とその教会の中に厳として立っている。たとえこの宗教が彼に於ては個人化され、彼は完成されたる箇性として自己の性格を以て、また全く独自の理性を以て中世に背を向けてはいるけれども。これに反してシェクスピアは全く近代と具現化している。彼はルネサンス時代に生れ、生活の豊かに自由なプロテスタントの国に活躍した。そこには頑信的妄信は既に消えていたから、実際ゲーテがほめた様に、彼は丁度よい収獲時期にこの世に来て彼の純なる内心の宗教性をば、何か一つの自分できめた宗教に関連させて自由に宗教的に発展させるという利益を享受し得たのであった。シェクスピアのこの彼自身の宗教性がハムレットに於ける程明瞭に現わされているものは他にはない。その宗教性は全面的に自然の知の泉から、即ち理性から養はれているのであるが、この力が「ハムレット」に於て宙返りする。認識欲が「ハムレット」の誇を導き出し、そしてそれと共に彼の不幸の原因を作り出している。ここが、そしてこの点のみが「ハムレット」と「ファウスト」との共通点となっているのである。世界に対する嫌悪から即ち世界の腐敗と無意義とを認めつくして、彼は享楽をも力をも、凡てこれを蔑視する。「ハムレット」は彼の理性によって永遠なるものと絶縁した。彼の思惟が彼の地獄行きを用意する。ダンテは彼の認識によって、それは遠い祖先の伝統的知識と調和して信仰にまで達しているところのその認識によって、天堂界へと飛躍する。

『「ハムレット」はおのが生活を永遠なるもの（神）と正しき関係に置こうとして、しかもその努力に於て失敗したところの人間の無力を説明したものである。ゲーテの「ファウスト」には人間の哲学と情熱と努力とがある。併し人間を永遠なるもの（神）に結びつけんとする宗教的熱誠がない、寧ろかくの如き憧憬をせせら笑っている。自信と努力とのみが人間の生活の基調であらねばならぬとする。然るに神曲は、人生の真意義を発見し、宇宙悪を見極め宇宙善を完全に把握し、かくて自己の靈魂を宇宙と正しき関係に置かんとしたるものである。』（中山昌樹氏神曲の研究）

ゲーテが『ファウスト』をとりあげた時、彼はダンテをも沙翁をも考えてはいなかった。ゲーテはダンテに就いては、その1つの歌だけを翻訳したことはあるが多くの、知っていない。

ゲーテは沙翁の作品に他の誰のものよりも多く傾倒してはいたけれどもどの場合に於てもそれに範を求めていない。ゲーテは凡てを自己の心の奥からすくい出した、彼は自分以外に範を求めていない、彼は成り出に向って戦い努力するところのプロメトイシ的ドラアに於て、ただ彼自身の状態を再現しようとした。そしてこの理想を助け、おし進めたものはシェークスピアであった。彼に於てゲーテは、われ等の兄弟であるところの人間を『非常な偉大さ』に於て知った。『自然自然シェークスピアの人間よりも自然であるものはない』(シェークスピア祭に)。ゲーテはプロメイスと競争した様にシェークスピアと競争した。この努力に於て彼は人類の歴史の中へ大胆な爪をさし込んだ。彼は彼の頑強な反抗者の姿を作り上げた、そして彼のファウストを作った。打ちくづをれた人間をダンテは信仰の力によって天に導き、沙翁は彼の懷疑によって亡びしめた。ゲーテに於ては、人間は最高の力、自然—ゲーテに於ては神を意味するところの一と1つになることを感ずべきであった。(この項は主としてトラウマンのファウスト研究によった)。

ゲーテはダンテをよく知らないで、「地獄篇は嫌悪すべく、浄罪篇は茫漠たり、天国篇は倦怠を齎らす」と云ったという事が伝えられているが、併し彼はその一小部分ではあるが翻訳も試みているし、エッカーマンは「要するにゲーテはダンテに就いて非常に尊敬を以て語った。その際に私に特に著しく気付いた事であるが、彼には能才という言葉では足りなくて、彼はダンテを1つの自然と名づけていた。それを以て彼は、遙に広く亘るところの予感に満ちた。そして深く広く周囲を見廻すところのものを表現しようと思っているらしかった。」(対話1824年12月4日)と云っているから、彼がダンテに対して大なる尊敬を捧げていたことは、確かな事実である。

神曲とファウストとの接触点としては常に「永遠女性われを引き行く」の句が挙げられるが、そのほか、贖罪の女の一人としてグレーチヘンが聖母に向って祈る言葉はベアトリーチェの導きのそれと同じ心であることを注意しておき度い。

譬へん物もないあなた様、  
光明の輝き渡るあなた様、  
恵み深くも、お顔をお向けなされて、  
私の幸福を御覧下さいます様に。  
昔、恋い慕はれたお方  
今は濁りのないお方  
帰ってお出でになりました。

及び天使等が

靈界の気高い一人が、  
悪の手から救はれたのです。  
「誰にもあれ、断えず努力する者は、

我等これを救うことを得。」

そしてこの方には、上の方からも

愛が加って来ました。

天福を享けた人々の群が、

真心こめて、この方を歓迎するでしょう。

は地上樂園をダンテが行きつつ、天使の歌に幻影を見る条を思はしめるものがある。

### 第3章 神曲とは如何なるものか、その目的

この歌がなぜ「神聖喜曲」と呼ばれているのか、それが今日のわれ等には最初の大なる疑問である。神聖というのは最高の讃辞であろうとは考えられるが、なぜ喜曲と云うのか、私などもその昔、コメディと云えば「ヴェニス商人」かモリエール物1、2ぐらいを知って、みなこのような喜劇とばかり思っていた頃は、この詩が喜曲とよばれている事を非常に不可思議に思っただけで大いに思い感っていたのであった。上田先生にでも問えばすぐ分ったであろうものを、若い者の一種のはにかみからそれもせず、永い間独りで不思議がっていたのであった。尤もこれほどのダンテ解説書にもみな書いてある事ではあるが、それらの研究書を知らない間は、ただ独りで考えて見たって分ろう筈はなかったので、ただ徒らに思い感っていたのである。

喜曲と云うのは、この場合に於ては全く中世の意義慣習に促ったものである。中世の詩学によれば、幸福に始まり不幸に終るものを悲曲と云い、不幸に始まり幸福に終るものを喜曲と称えた。つまりアリストテレスの詩学にいう所よりはずっと広い意味に用いられているのである。神聖という冠辞は後代の人が讃嘆の意を表すべく添えたるもので伊太利の慣用語として、凡て尊き、美しき、気高きものをみなディヴィナと云ったのによる。古くは「喜曲」La Commedia と呼ばれ、或は詩形によって La terge rime と呼ばれ、その歌旨の上から見て「夢物語」La Visione と呼ばれていたが、1555年版に始めて「神聖喜曲」と名が用いられてから、近代に至ってこれが定った名となった。またラテン語を用いず伊太利語を用い、皇天の讃美に瑰麗の辞を連ねてあるその間に人の不徳を責める皮肉嘲罵の語を挿んである事から喜曲と喜ばれるのであって、それはダンテ自身が「悲曲の形にて詩材を取扱うときは口語の醇雅なるを選びて頌を作り、喜曲の調にて言うときは単に賤しき詞にて足る」と「俗語論」の中に云っていると相適うわけである。しかし、この詩が詩文中の何れの分類中に入れらるべきかはむづかしい問題である。

シュリングの云っている様に、「神曲は単独な詩でなくて新しい詩全体を代表し、且つそれ自ら独特の種類のものであり、また全く比類のないものであるから、特殊の詩形にあてはまる如何なる説も神曲にはあてはまらない。神曲はそれ自身1つの世界であって、独特の説を要求

## ダンテ神曲解説序説

する」のであるから、簡単にその属すべき種類を決してしまうことは出来ない。それが単なる抒情詩でない事は誰にもわかる。寧ろ叙事詩の中に入れた方がよいかと思はれるが、一定の事件の連絡を歌ったものでなく、曲中の人物相互の交渉なく、諸事象はダンテの眼前を通過する走影の如きものであるから、叙事詩とすることも当らない。劇詩とみるが適切かと思はれるが、これも必ずしも適当ではない、首尾一貫せる動作を欠いている事、ダンテ自ら曲中の主人公となっているが、普通の意味の主人公として活躍していないで、全く労働の地位にその身を置いているから、この点では寧ろ叙事詩に近い。教訓的趣意が強く盛られているから教訓詩であるとする人もあるが、併しそれにはあまりに多様の意味が含まれすぎている。単独の問題を敷衍したものでないから普通の教訓詩ではない。要するにその本質は大詩聖が自家の閱歴を傾けて、中世の宗教、哲学、詩歌、科学を渾成して自家独立の幻想を構成したことにある。一つの完全なる宇宙であり世界であり、総合芸術である。

かく云つたればこそ、それはその文芸的意義を否定し去るのではない。その近い目的は美的芸術的作品たるにある。「新生」と同じく「神曲」も第1位には芸術的目的をもち、読者の美的感情に対して最高要求を置くと共に、中世の基督教主義がなし能う限りの、詩的享樂の為にも最も豊富なる美果を捧げているのである。何と云っても第1位に於て、純文芸的作品である。

しかしダンテはそれだけで満足は出来なかった。ダンテはアリオストやタッソーの様に全く美的享樂に終始して、それ以上に読者に対して何等の要求を置かないというような性格の人ではなかった。彼の如き情熱の人、彼の如き強い意志、全時代を動かすところの凡ての流れの中心に投げこまれている彼の如き人格は、人生の帰趨というべき諸の目的に、一生の主目的を役立たせようとするのを禁ずることは出来なかった。それ故に神曲は1つの大きな目的を追っているということを否定することは出来ない。ダンテの活動はこの世に於ては主として政治の領域にあった。彼は神曲のうちに諸種の人物を自由に駆使して、彼の政治的理由を宣伝せしめている。それ故神曲はある意味に於て、嘗て世に現れたところの最も有力なる論争的な政治的文書であると云はれている。多くの人が推測し得る様に、この詩の目的が政治の範囲に向って進み或は寧ろ政治的活動に於て動いているとしても全体としては宗教的・道徳的問題に向けられたる相が主として大きく現はれているのではあるまいか、これは1つの重要な批判の動機である。この傾向が彼に於て強かったことは「饗宴篇」に於て「カンツォーネ」にも道徳的目的が内在していると云っていることによって裏づけられる。18世紀の末迄の凡てのダンテ研究家はみなこの見方を肯定している。そしてそれが一般の確信を得るに至った由因は、ダンテ自身のカン・ランデへの書簡の中にある。若しこの書簡が正しいものであるならば、それは、この詩の目的に関して確実な解釈を提供するものである。そこに云はれている所によれば「全体世びに細部の目的は多様である。即ち近い目的と遠い目的とである。細説は省くとして、要するに、それはこの世に生きている者たちを不幸の状態から幸福の状態に導く」にある。それは

## ダンテ神曲解説序説

「人間の聖化」Torasmanar liunanitie である。「個人に於てもまた凡ての人に於ても存在の大きな海を渡って多くの港に向って努力する人にとっては、人間の上への飛揚を妨げるところの障礙Impedimentiから人間を自由になすところの途を拓き示すことが大切である。そしてこれ等の障礙は「迷と罪とである。」（天堂界第1歌）

神曲の趣旨に就ては今一度ダンテ自身の言葉に聞こう。彼は自分で神曲註疏を書こうとした程であるから他の場合に於てもこれを闡明すべき材料を提供している。

饗宴篇第2節第1の始に於て彼は云う。「凡そ文章は主として四様に解かるべきである。第1のものは文字通りの解釈でその意味が文字以上に出でないものである。第2のものは寓喩的と云はれるもので、それはその物語の外衣の下に隠されたる意味であり、美しき仮構のかけに置かれた真理である。寓喩の解釈は詩人と神学者によってちがうが、詩人の用例に従えば、例へばオヴィードが、オルフェウスの豎琴は荒き獣を馴らし木や岩をも己れに近寄らしめたといっているのは、結局、賢者はその音楽によって残酷な心をも和らげ、知識と技術とを知らぬ者をもその心のままに動かすということを云はんとしているのである。第3のものは道徳的解釈であって、読者が自己のためまた子弟のために、文章の間を歩みつつ拾い集むべきもの、例えば基督が山に登り給うとき、12人の使徒のうちよりただ3人を伴ったと福音書にあるのを見て、これを道徳の見地より考え、最も秘密なことには極僅かな伴侶を携うべしという教訓を読み出すようなものである。第4の義は神秘的と云はれるもの即ち知覚以上の説き方を云う。例えば『イスラエルの民埃及を出でし時、猶太は聖められ積み放たれたり』と予言者の讃詠にあるのは、この歌は言葉通りに即ち文字の上から見て、明らかに真実であるが、心霊の義に釈いてもひとしく真実である。即ち靈魂が罪より脱出するとき、われと自らを支配して聖く自由になると云う意味に解釈しても正しい。」ダンテは時代の子として寓言譬喩の論弁を好み、神曲の文字を字義的にのみとらぬ様に警告している。

## 第4章 詩形・詩材・結構・暦日

神曲に用いられたる詩形は所謂テルザリマ (Tergarima) 独逸ではテルツィーネ (Tergine) と呼ばれているものである。11熟音3行を基とし、中央の韻を踏むだ所謂トルネルロ (Tornello) (員外行) 1行を附加する。即ちその形式は次の如くなる。

ABA, BCB, CDC, DED……………XYX, YZYZ (解説の処々に挿んだ原詩の抽出を余照されたい。)

この詩形はダンテが「神曲」に用いてから、漸次欧州の詩壇に広まり、各国の詩人がこれを用うるもの漸く多くなった。独逸ではシャミッソーの「サラス・ジーゴメス」の如きが有名である。英国ではチャーサーがこれに多少の変化を加えて用い、ついで処女王朝初期の詩人がこれに倣い、近世に入ってはシェリーの「命の凱歌」が最も著名である。しかし他国語は押韻が

## ダンテ神曲解説序説

伊太利語ほど自由でないで、韻を完全に踏もうとすると端窘束を生じて無理が起るので、自然内容的に原文への忠実さからは離れざるを得なくなる。世界的名訳として既に定評をもっているもの、たとえば英訳ではロングフェロー、独で訳はフィラレテスは共に無韻訳である。内容への忠実さを多少犠牲にして形式をかたく整えた訳もあるが、独逸のツォスマンはその中間を行って2行目の韻をすててしまっているが、それでは各テルツィーネの連絡が全くなってしまうから、無韻訳と扱ひはない事になる。それで独逸訳では独逸語に適切で、その国人に好まれている詩形をとっているものもある。これ等は原詩の意を汲んで新しい詩を自作している様なものであるが、その例示として私は解説の場合にわざわざポーホハンマーやガイゾフの訳を摘出して、自由訳又は追想新詩作と名づけて置いた。この種の自由訳は詩聖を冒読するの譏は免れ難いかも知れないが、自己の信念に於て忠実な心で行はれるなら、それにも大なる意義があると思うのであるが、私にはそれだけの自信も詩才もないから今はそれを考みようの意図はないことを告白する。

このテルツィーネ詩形は13世紀の後半南フランスで所謂プロヴァンスのトロバデュール詩人が用いたことに、その端を発するのであるが、ダンテはこれに自分の技巧を加えて靈妙なる高調を作り成したものである。トロバデュール詩人の詩には恋歌の外に、堅い教訓諷刺的なものにシルヴァンテス *Sirvantes* というものがあって、この形は主としてこの種の詩に用いられていたのである。これは元来セルヴィル即ち奉仕という語から出たもので、宮廷の詩人が時折り作歌して君主に奉仕することから出たのであるが、漸次それが教誨嘲罵の体に移り、主として羅馬の法門を譏る民論の機関となった。ダンテはそれに独創の彫琢を施し、婉美の姿をも加え、もた幽遠の想をも寓せしめ、かくてそれが地より天に響いて、死者を神の審判の庭に呼び出すところのトロンボーンの高き響となったのである。

詩形の上に於てプロヴァンスの詩が先縦である如く、内容的にもその先駆者があるのか如何かが次の重要な問題となる。そもそも中世のこの頃には他界歴遊の夢物語は数多くあったのであるが、元来中世人に普通の思想として、あの世の事を思う思想は一般的に内在していたのであったから、ダンテがそれ等の何れによって幻想を構えたかを尋ねるのは無益の業であろう。あの世を周遊するという思想は古く埃及やバビロンにあり、東洋の諸伝説にも見られるのであるが、その構想措辞の上に直接影響を与えたものは、ダンテが導師と仰ぐヴィルギールの「第四牧歌」「エネアス」第6巻の地獄巡りなどであろう。「フラーテ・アルベリーゴの夢物語」(地獄界第3歌浄罪界第27歌参照、1130年頃使徒ペテロ及び2天人に導かれ三界を歴遊した物語)やまた中世の全歐を風靡したアイルランドの幽婉なる霊界歴遊の夢物語、或はタッソーと同時代のアラテスタ・ポルタの「クェリーノ・ノスキューノの旅あるき」という小説に関係があるという学者の研究もあるが、とにかくダンテの詩材の源を確定することは出来ないであろう。中世の民はかの「千年説」に惑い、主の降世の後、千年にしてヨハネの示したる如く大魔王は縛を解かれ、死の陰府とは死者をわたすべしとっていたので、恐怖の情は当代の文芸美



## ダンテ神曲解説序説

術に歴々として現はれ、地獄煉獄極楽三重の舞台を設けて色々の見世物等も盛であったそうであるから、ダンテも幼少の頃これ等を見たであろうことは容易に推測され得る。要するにダンテの詩は追放流離の生活中に於ての勤勉なる読書により法俗両界に互って当代学芸の粋を萃め、中世人の思想感情に最高の芸術的形式を与え得た上、直接に当代社会の生きた事実に材をとって、混沌たる中世末の世界を天上高き処より俯瞰した一幅の活画図を成し、稀代の詩材を勵して、一大寓言を編み成したところにその特色が存在するのである。

ダンテの神曲に現はれた宇宙の観念は主としてトレミーの天文学に基いて、当代の素朴な宗教的信仰を加味したものである。その構造布置に関しては、解説篇に於ての三界各篇の解説の始めに詳説する。

宇宙の観念と世んで「神曲」の結構に関係の深いものに、これも中世の信仰に基く数の神秘説がある事は注意されねばならない。しかもこれは欧羅巴中世のみならず、支那も三、五、七、九等を尊んだことは殆く人の知る所である。その昔バビロンは七の数を崇び、ヘブライにもその習あり希獣ではピタゴラスの徒、新プラトン派の人々から初代基督教徒、中世神学家、みなこの信念をもっていたのである。

「神曲」には地獄、浄罪、天堂の三界があつて三大歌 *Cantica* をなし、更に地獄界に34、浄罪界、天堂界に各33小歌 *Cants* あり合せて100歌をなす。100は完数10の自乗である。そして地獄界第1歌を全篇の序と見れば、これも他と同じく33小歌よりなっているのであつて、この数は即ち3に10を乗じ、それに3を加えたものである。詩形は3行格であつて、各1小歌をなすテルツィーネの数は38乃至53であるが、行数から云えば、長短の差は甚だ小さい。浄罪界第33歌に、

おゝ読者よ、書くべき余白のわれに許されてあらば、

飲めども飽かざるこの甘き水を、

なほもせめては歌ひ尽さんものを、

されど分第二の歌にと定めらし紙は、

今や既に尽きたるが故に、

技巧の手綱はわれをして先え進ましめず。とあるは、明かに行数を大体に於てきめて行くというその用意の始からあつたことを示している。各3大歌の最終行を各星 *Stelle* という字でとめたこと、また基督の御名を行末に用いたる時は他の文字を以て押韻することを許していないことなど、形式に関して種々の深い用意のあつた事が窺はれる。

宇宙の構造の上に現はれたる数の神秘は更に著しい。三界には各9小別がある。地獄界は9圏、これに外圏を加えて完数10をなし、浄罪界は浄罪、外界、煉獄7台、地上楽園を合せて9区、天堂界は遊星7天、恒星天の9天あり、終の大光明天は宇宙の本源であるから数えないでもよいのであるが、これを加えればやはり完数10となる。

地獄界の罪業の区別もアリストテレスの倫理説に従つて3種に分たれている。1は放縦(又

は不節欲) Incontinenga 即ち官能欲を適度に節制せざるより生ずる種々の悪行、2は獣心 Bcstialita 即ち普通ならば厭うべきものが好ましくなりたる徳性上の病、3は兇悪(又は毒心) Maligia 即ち人間特有の理を濫用するに基く暴逆である。放縱即ち不節欲の中には邪謡、号食、貧欲、浪費の4小別あり第3の兇悪には詐偽、逆謀の2小別あり、これに第2の獣心を加えて7罪をなすが、これにアリストテレス倫理説外の罪、即ち異教徒並びに洗体を受けなかった者の不信と更に異教者の偽信を加えて地獄9圏の罪が完成される。

この外にも山腹に詩人を阻む3猛獣、詩人を保護する在天の3聖女、三界を通じて詩人を導く3導者、ヴィルギール・ベアトリーチェ及び聖ベルナルドがある。また大魔王に3面あり、人の心を焼く3猛焰、<sup>ダイス</sup>陰府の塔上に<sup>フーリエ</sup>3妖女があるなど、ダンテが到る処に3の聖教を重んじていた事は立証される。

神曲の発端は基督暦1300年である。中世の暦算法には3種あり、第1は今日と同じく1日より起算するもの、第2は羅馬に行はれたるもので降誕祭12月25日から起算するもの、第3はフィレンツェ・ピサで用いられたもので受胎祭3月25日から始めるものの3種であるが、ダンテはその語る所の空しい夢幻界の作物語ではなく、恐るべき現実であることを深く感ぜしめるために、篇中幾ヶ所となく正確な暦日に合せて、時日の経過を明かにしている。但し聖金曜日を3月25日としたのは仮託で実際は4月8日であるという説がある。それは、

その時太陽正に春分黙に位す(地獄界第1、歌38—40行、天堂界第10歌7—33行)道を幽林に失いしは聖金曜日の前夜にして月円し(地獄界第21歌112行—114行、第20歌127行)から見るのであるが、春分、聖金曜前々、満月の3頃に合致するもの、1300年にはないから、これは理想の時日で3月25日又は4月8日であろうというのであるが、しかし到底これは決定しかねる問題であるから、私は解説篇に於てはフィラレテスの説に従って3月25日又は4月8日として記して置いた。

登山の志を立てたのは聖金曜日の日まさに上らむとする時またヴィルギールと周遊の途に就いたのは、その日の夕暮である。(地獄界第1歌第2歌)

地獄界第4圏より第5圏に移り行く時、さきに門内に入ろうとした時上った星の数々が漸く淡くなり将に下らんとして夜は更ける。即ち金、土間の中夜を過ぎてのことである。(地獄界第7歌)

第8圏第4項の橋の途中で月は入った。(地獄界第20歌)これを詩人の師ブルネット・ラッティエーニの説に従って計算すれば土曜日の午前6時52分に当たるという。フィラレテスは7時30分頃と云っている。

第9項の央で月は足下にあり。(地獄界第2の歌)とあるから、それは土曜日の午1時頃。そしてその夕暮6時頃に(地獄界第34歌)大魔王の傍へ行く。それから魔王の横を過ぎ地心を過ぎて身を翻し、登り進み、翌日即ち日曜日の暁方に浄罪山の麓に達している。その夜は君王の谷に過ぐし、翌日から浄罪山の巡歴を始め、それに月火水3昼夜を貫し、地上樂園になお半

## ダンテ神曲解説序説

日止って、木曜日の正午天堂界に入る。

天堂界に入ってから暦日の記事稍明確を欠くが、凡そ24時間を経て物界9天を上り終り、大光明天の時間空間のない境に入り、かくて天上の夢が破れて、日の聖都に沈むころ殆ど伊太利の上に立つ。(天堂界第27歌) 即ち神曲の暦日は幻想の始めより始めて正に1週日であるのである。